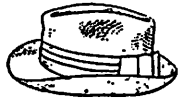


学習者から見た英語辞書



投野由紀夫

1. 「英語辞書王国」日本

すごいタイトルで書きはじめているが、実際これはまんざらウソではない。日本は現在英語辞書の出版に関しては世界的なレベルにあると言えよう。出版社の数、辞書の種類、内容、発行部数...どれをとっても日本くらい英語辞書を作って商売になっている国は世界でも稀である。

そのことは世界も知っている。特に学習辞典の開発で15年ほど前から徐々に競争が激しくなっている英国では日本を含むアジア圏をターゲットにした学習辞書のマーケットが大きく拡大している。この専門用語で言えば L2 Lexicography の分野がこの10年間で飛躍的に伸びたのはひとえに経済大国日本のおかげといっても過言ではなかった。

2. 加熱する「学習辞典戦争」

もともとは欧米の辞書の引き写しだった日本の辞書作りも、古くは斎藤秀三郎あたりが、そして昭和に入っては岩崎民平以降着実に日本独自の bilingual dictionary の特徴を良く考えた作品が世に送り出されていった。英国で LDOCE が出たのは1978年であるが、その当時の日本の英語学習辞典の内容は研究社の『中英和』『ユニオン』を筆頭に世界の学習辞典のお手本といえるような素晴らしい出来であった。

ところがその LDOCE が OALD に対抗して発売されるや、日本が圧倒的にリードしていた学習辞典の内容は徐々に彼らに研究され吸収されていく。最近では Longman Language Activator や一連の COBUILD の辞書群などはかつての日本のお株を奪うような新しい辞書作りの工夫を重ねており、日本は逆に最近の中辞典レベルの製作現場ではほとんど LDOCE や COBUILD などに

お世話になりっぱなしである。米国でも徐々に EFL Learners' dictionary という言葉が status を得て来ており、National Textbook Company の一連の辞書などは米国がこのマーケットに参戦してくる気配を感じさせる。

危うし日本! Activator の攻勢の次は CO-BUILD や Longman が corpus を公開し日本が全く再起不能になるような壮大な計画をもくろみている。Internet が利用可能になれば辞書製作は革命的に変わるだろう。日本の旧態依然たる辞書編集完全密室主義では敗北は免れ得ない! がんばれ日本!

3. 完全に忘れ去られたユーザー達

待て待て。あんまり熱くならない。実はこのような図式を見ていると辞書好きな私は胸が熱くなってしまうのだが、一方メタ辞書学が専門の私としては個人的な思い入れは極力排して、このことを言っておかねばならない。すなわち今までの話は 100% 出版社主導であって 100% ユーザー不在である、という点である。

以前も書いたことがあるが、辞書は元来「権威」の衣を来ているので、出たら出っぱなしで誰も細かく批判してくれない。岩崎研究会のような頭脳集団でもなければまともな批判は出来ないとされているのである。そのせいか辞書は商品であるのに、ほとんどマーケットリサーチが行なわれない(それでいて良く売れる)珍しい代物なのである。

しかし言語学的な見地から言葉を正確に記録するという趣旨の辞書(例えば OED のような)ならば一部の学者先生の達見で作る、それでもよからうが、こと「学習辞典」に関する限り話は別である。「記述の正確さ」という基準以外に「ユーザーのニーズやスキルを考慮しているか」という別

の基準が加わってくるからだ。

この点で現在のいわゆる「学習辞典」というのはほとんどがえらい英語学や英語教育の先生方の頭の中で「こうしたら便利だろう」と思う「思いつき」によって作られているという域を出ていない。そして自分達の作った辞書が一体どのように利用され、どの情報が役に立っているのか、と言った市場動向はほとんど興味を持たれていないのだ。「それでも売れているからいいではないか」という世界なのである。

このままでいけば日本の学習辞典は新しい辞典を出す際に必ずそれ以前の辞典の特徴を全て網羅し、かつ1,2個の新機軸を付け加えるという肥大化の一途をたどり、そのうち情報量的にも提示方法的にも行き詰まるようになるだろう。どれもほとんど同じような内容になり、競争力がなくなり学習辞典市場は飽和状態になる。

それを防ぐためにもカヤの外だったユーザーに光を当てなければならぬのである。

4. 辞書ユーザー研究最前線

実は日本よりもヨーロッパでは辞書ユーザーへの関心度は早くから高かった。日本にはまだ英語辞書学会はないが、ヨーロッパでは1980年代始めに European Association for Lexicography (EURALEX) が設立され、その初代の会長である R.R.K. Hartmann (University of Exeter) はユーザー研究の推進者の1人である。また OALD の編集主幹である A.P. Cowie や LDOCE の編集の Editorial team に入っていた Gabriele Stein, Philip Scholfield, また lexicographer の Robert Ilson, Janet Whitcut などは皆ユーザー研究に強い関心を持っている人達である。EURALEX では早くから user study と呼ばれる領域が確立され、辞書の情報量の肥大化とユーザーの消化不良が指摘され、辞書使用の実態調査の重要性が叫ばれて来た (Cowie 1983: 136)。

読者の皆さんの中には LDOCE や日本の『ライトハウス』などが辞書指導用の workbook を一緒に出していたのを入手した方もいるだろう。当時は情報量を多くしていったユーザーをそのレベルまで訓練する、という発想があの手ワークブック作成のアイデアの元になっていたのである。しかし一方で本当に user-friendly な辞書を考えると辞書の情報提示の方法をユーザーのレベルに

合わせるという考え方もあるわけで、それではユーザーのレベルとは何かといふところの辺のはっきりしたデータは10年ほど前は皆無に等しかった。

現在は米国、英国、ドイツ、フランス、オランダ、南アフリカなどで特にユーザー研究を専門で行なっている研究者がいる。私も数少ない1人である。今まで無視されていたユーザーの動向に光を当て、その情報をもとに辞書を見直す。次のセクションから少し具体的な事例を見ながら、この分野の持つ意義をじっくり考えてみよう。

5. ユーザーはどのように辞書を引くのか?

辞書ユーザー研究には大きく分けるとニーズ分析 (needs analysis) とスキル分析 (skills analysis) があるが、ニーズ分析に関しては Béjoint (1994: 140 ff) を参照していただくことにして、ここでは辞書ユーザーの検索ストラテジー (look-up strategies) に関して注目してみよう。

例えば手元の学習英和辞典を見てもそこにはさまざまな情報が盛り込まれている。

- ① [U] [C] (可算/不可算名詞)
- ② 語義説明 (gloss) (例: channel (船が通れる)水路)
- ③ [自] / [他] (自動詞、他動詞)
- ④ 選択制限 (例: desire <人> が <物事> を [...] することを) 強く望む)
- ⑤ 連語情報 (例: fire... [at, on])
- ⑥ 例文

英語学習者は英文を理解する時にこのような情報をどのくらい利用するのであろうか?

具体例を見てみよう。仮に皆さんが次のような文に遭遇したとしよう。

I *beducked* on my physical condition.

beducked という語の意味を理解するのに、皆さんはどのような情報を頭に入れて辞書を引くだろうか? まずある程度の英語力があれば beducked が主語 I の後ろにあり他に動詞がないことから推測してこれを動詞であるという予想が出来るだろう。また実際に辞書を引く際には beducked そのものよりも -ed をはずした形 (beduck) で引く方が良いことも予測出来るだろう。

次に実際にこの単語を引いてみたところ、次のような訳語があったとする。

- beduck [自] 1 喜ぶ
2 心配する

これだけではどちらの語義が正しいか文脈からは判断出来ない。「体の調子がいいので喜ぶ」でも「体の調子を心配する」でも意味は通じるからだ。しかし次のような情報が加わるとどうだろう。

- beduck [自] 1 喜ぶ (for...)
2 心配する (on...)

今度は先程の⑤の連語情報が与えられているので、この情報を活用できるユーザーは2の方をより妥当な訳語として選択するはずである。

このような仕掛けをうまく使って辞書ユーザーの情報の活用度の調査をしたのが、Tono (1984)である。実は読者の皆さんはすでにお見通しだと思うが、この beduck という単語は人工語である。上記のような複数の異なる情報を組み合わせてミニ辞書を作成し、それを学習者に実際に使わせて英文を日本語に訳す作業をさせ、情報の有無によって検索がどのように変化するかを実証的に見たわけである。

以上の実験から分かった辞書検索プロセスの一部を図1に示そう。

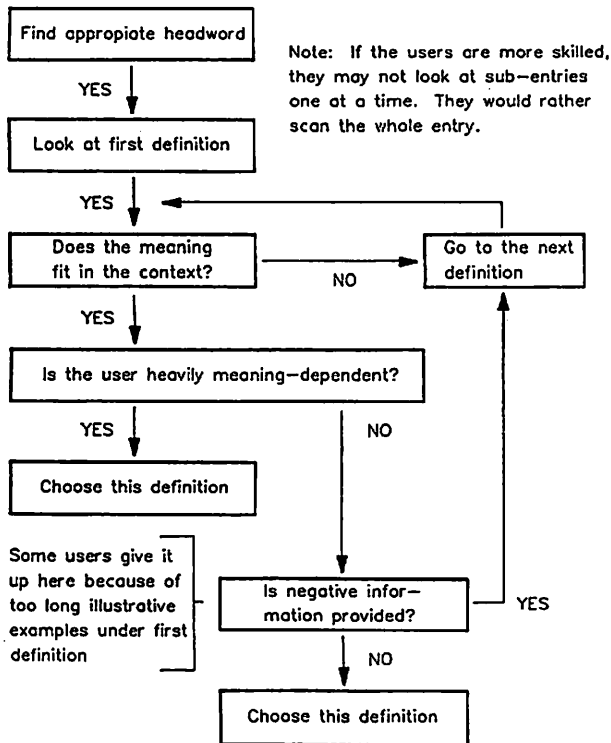


図1 Tono (1992) より

少なくとも recognition レベルでは、上記の①～⑥のような情報を活用して語義の特定をしているユーザーは非常に少ない。例えば、この単語は単数で a がないので不可算名詞の語義を見る、と

言った積極的活用はほとんどしない。大体が自分で文脈から合いそうな意味を辞書の1番目の語義から当てはめていき、合っていればそれで済ませるのである。そして文法情報などは候補をはじくための否定情報として用いる。1番目になかった時が大変で、多くのユーザーは例文があまりにたくさんあると2番目以降の語義に行くことが面倒くさくなってしまおうという現象が見られた。

以上のような点から、読解に際して辞書を引く際には文法情報などは比較的限定されたもので良いこと、出来るだけ全体を見渡せるような工夫が必要なことから Tono (1984) では当時まだあまり学習英和辞書では利用されていなかったメニュー方式を提唱するなど、いくつかの辞書の情報提示上の工夫を試みた。

その後このメニュー方式は徐々にいろいろな辞書に使われるようになった(私の論文を読んでかどうかは知らないが)。レイアウトや色刷りなど情報の提示にも更なる工夫が凝らされた。しかし新しい工夫はその効果を検証される必要がある。私は自分が推奨したメニュー形式の提示方法の効果を検証してみることにした。

6. 新機軸は本当にユーザーの利益か?

現在かなりの英和辞典で採用されているメニュー形式の効果を実験的に検証しようとしたのが、Tono (1992) である。メニューを載せたものと載せないものとの2種類のミニ英和辞典を作成し、それを辞書の引く経験が確実に異なると思われる2つの集団(中学3年と大学1年)に使用させてみて、辞書からの情報の引き出しやすさをテストしてみた。その結果が次の表1である。

	メニュー効果あり	メニュー効果なし
中学3年	78%	22%
大学1年	0%	100%

表1: 情報のメニューによる検索効果

ここではっきり分かるのはメニューは中学3年生には効果的だが、辞書を引き慣れた大学1年生にはもうあまり関係がない、ということである。この結果からもメニューが比較的初学者向けの辞書に多用されるべきであることが分かる。逆にあまり大学生や社会人対象の辞書にごとごメニューを載せる必要はないのである。

以上のように学習辞典の世界にも科学的な探求の成果が現れて来つつある。

ユーザーの動向調査 → 情報提示の工夫 → 工夫の効果測定 → 情報提示の改善

と言った図式をもっと明確にしていくことによつて、もっとユーザーを意識した辞書作り、真に user-friendly な辞書が出来ていくはずである。

7. 辞書と第2言語習得の微妙な関係

読者諸兄の中には「このオーラルコミュニケーションの時代に辞書をちまちま引いていられるか」と怒っておられる方もいるかもしれない。しかし最近の第2言語習得の研究はいくつかの点で、辞書を使って学習者が自学自習する世界の有効性を指し示している。

まず第1に、言語の獲得はかなりの量の input を必要とするということである。日本の英語教育がいつも心細いのは十分な input がないからである。日本のように acquisition-poor な習得環境ではいろいろ指導上の工夫はあるが、まず英語に接する機会を増やしてあげる工夫をしなければ始まらない。

第2に、最近の研究は人間は頭に既に文法を習得するのを助けるようなメカニズムが入っており、一定のデータに接することで頭の中の文法生成メカニズムが作動して成人の文法を産み出してくれるということを言っている。このメカニズムが Chomsky らの言う Universal Grammar である。そして最近文法の骨組みはこの UG のおかげで比較的短期間に習得でき、言語習得のメイン・ディッシュはむしろ語彙の獲得である、という人が増えて来ている。日本人の場合は既に母語として日本語がある。習得のかなりの部分は日本語の文法知識が助けてくれるはずであり、英語の文法の骨組みを身に付けるのに実際に非常に時間がかかっているのは文法ではなく、語彙習得の面だということも出来よう。

第3に最近よく耳にする CALL, CAI, マルチメディアと言った分野の進出である。情報がこれだけ多様化し国や文化の垣根を越えてアクセス可能になると当然世界共通にコミュニケーションする手段としての英語にフォーカスが集まる。英語教育にこのマルチメディアがどう乗っか

るか注目されているのである。

以上のような最近の動向から次のポイントが見えてくる。

- ① 日本の英語教育には英語に触れる総量をアップする努力が必要
- ② マルチメディアで個人が英語に触れるモードは確実に増える
- ③ 基礎的な文法を終えれば後は個人で語彙習得に励めばよい
- ④ 個人が生身の英語に接する時に必要なのは自学自習を助けるような辞書機能である

実際に英国などでは Self-access という言葉が buzzword になっている。個人が自由に端末に来て情報を引き出す時代なのである。そのモードが英語であれば、辞書は絶対に必要だ。

「ALT がたくさん来ているからもっと oral communication を徹底させればよい」という方もあろう。しかしいくら ALT がたくさん来ても学校内英語教育では時間的に絶対量が足りないのである。我々は学習者にもっと英語に自分で触れるモードを提供していくように努力しなければならない。

8. 21世紀の英語教育と辞書

現在私の周りでもやれマルチメディアだ Internet だとにわかに騒がしくなってきた。あと5年もすれば21世紀に突入する。私は今から日本の出版社、特に辞書をやる会社の方は次のようなイメージを描きながら辞書製作をして欲しいと思っている。

- (1) 学校英語教育の大きな2つの流れ：1つはコンピューターによる自学自習モード。ここで生徒達は文法の基礎的ドリルとたくさんの英文を読んだり書いたりする作業をする。もう1つは教室における ALT との interaction だ。日本人教師はこれらを coordinate する task designer となる。
- (2) 学校外の英語教育はもっぱら自宅における端末から呼び出される世界の情報を自分で加工して行なうことになる。英語学習に関するものは例えば以下のようなモードを持つ。

- a) 一般の英語放送(ニュース、映画、ドラマ、音楽など)
- b) 英会話学校提供のプログラム

(p. 65 へ続く)

年からは何に日記をつければいいのかと今悩んでいる。発行されないというのは、売れないからにちがいない。生徒に書かせる前に、先生方、英語で日記をつけてみませんか。そして研究社のあの『英文日記』を復活させましょう。書く分量や何十年分をも保管するスペースのことを考えると、私にとっては今までの形がいいのだが、時代にマッチしないのであれば、形式が変わっても仕方がないだろう。ワープロやパソコンが利用できるように、ファイル式がいいのかもしれない。ともかく、『英文日記』よ、蘇れ!

(愛媛県立川之江高等学校
毛利公也)

ブロック体への傾斜

私は中学校で英語を習い始めて以来、英語を手書きするときにはいわゆる筆記体で書くのが当然だと思っていた。しかし4年前、ある私立中学校で講師として2年生・3年生に英語を教えたさい、筆記体を読むことのできない生徒がクラスにいたた

めに、授業のときに板書ではいわゆるブロック体で書くようにした。2年前から現在勤務している高校で英語を教えているが、やはりクラスに必ず数名は筆記体を読めない生徒がいるため、板書にはブロック体を用いている。

筆記体の方が速く書くことが出来るので、授業をてきぱきと進めるためには筆記体で板書したいとも思っているのだが、私個人としては筆記体は必ずしも生徒に押しつける必要はないと思っている。というのは、筆記体で書かれた英文を読む必要というのはそう多いものではなく、また慣れればブロック体でも相当速く書くことが出来るからである。

他の人は板書のさいにはどちらで書いているのだろうかと思い、先日、私の勤務校の英語教員、20名に尋ねてみた。その結果は、

筆記体のみで板書: 7名
ブロック体で板書: 10名
両方の字体を併用: 3名
であった。

なお、両方の字体を併用するさいには、例えば教科書にある文章は筆

記体で書き、解説のための語句などはブロック体で書くというように、使い分けがなされている。年齢が若くなるほどブロック体の使用率が高まり、20代ならびに30代の教員は全員ブロック体を用いていた。さらに20代前半の教員には板書のみならず自分のノートに英文を書くさいにもブロック体を用いる者もいた。その教員は高校のときにブロック体で書く方が間違いにくいので有利だといわれ、それ以後ブロック体を使用しているとのことである。

板書に関して、筆記体からブロック体へという大きな流れがあるといえる。生徒の書く英語の文字を見ても、ブロック体で書く者の方が多いのが現状である。ちなみに、私の担任するクラスの英語の期末考査の答案42枚のうち筆記体で英文を書いているのは8枚で2割弱である。女生徒の中には丸みを帯びた独特のブロック体を書き、その字体がかわいいという者もいるそうである。今後、ブロック体への傾斜はますます進むのではないかと思われる。

(初志高校 中島伸一)

(p. 13 より続く)

c) コンピューター内蔵のタスク開発プログラム

d) コンピューター内蔵の辞書

一般の放送を視聴して、好みの部分を自分でクリップし、それをタスク開発プログラムにかけて単語レベルを調節したり、穴埋め問題に変えて聞き取り練習をしたりできる。またコンピューター内蔵の辞書は練習モードを備えており、今見たばかりのニュースの知らない単語の使い方をいろいろ練習してみることが可能だ。

こういうイメージの中で辞書を考えるとそれはもう単に電子辞書というよりも「総合言語学習ステーション」の心臓部なのである。それはコーパスを内蔵し、ユーザーのレベルに応じて提示内容が変わったり、ユーザーの好みによってどんどん進化する辞書なのである。(投野 (1993) 参照)

言葉に尽くせないが、以上のようなことに関してもっと詳しく知りたい方、議論したい方は是非

ご意見をいただきたい。Internet address: tono@u-gakugei.ac.jp でお待ちしている。

〈参考文献〉

- Béjoint, H. (1994) *Tradition and Innovation in Modern English Dictionaries*. Oxford: Clarendon Press.
- Cowie, A. P. (1983) The pedagogical / learner's dictionary. In R.R.K. Hartmann (ed.) *Lexicography: Principles and Practice*. pp. 135-144. London: Academic Press.
- Tono, Y. (1984) *On the Dictionary User's Reference Skills*. Unpublished B.Ed. dissertation. Tokyo Gakugei University.
- Tono, Y. (1992) The effect of Menus on EFL learners' look-up processes. *LEXICOS 2*, pp. 230-253. Stellenbosch: Buro van die Wat.
- 投野 (1993) 「Self-access system: 言語教育における自己学習システムの新展開」『英語教育学の現在』(伊藤嘉一他編), pp. 47-58. 東京: 桐原書店
- (とうの・ゆきお / 東京学芸大学講師)